

エロ同人女作家が

フアッコのおじさんをも

性的に

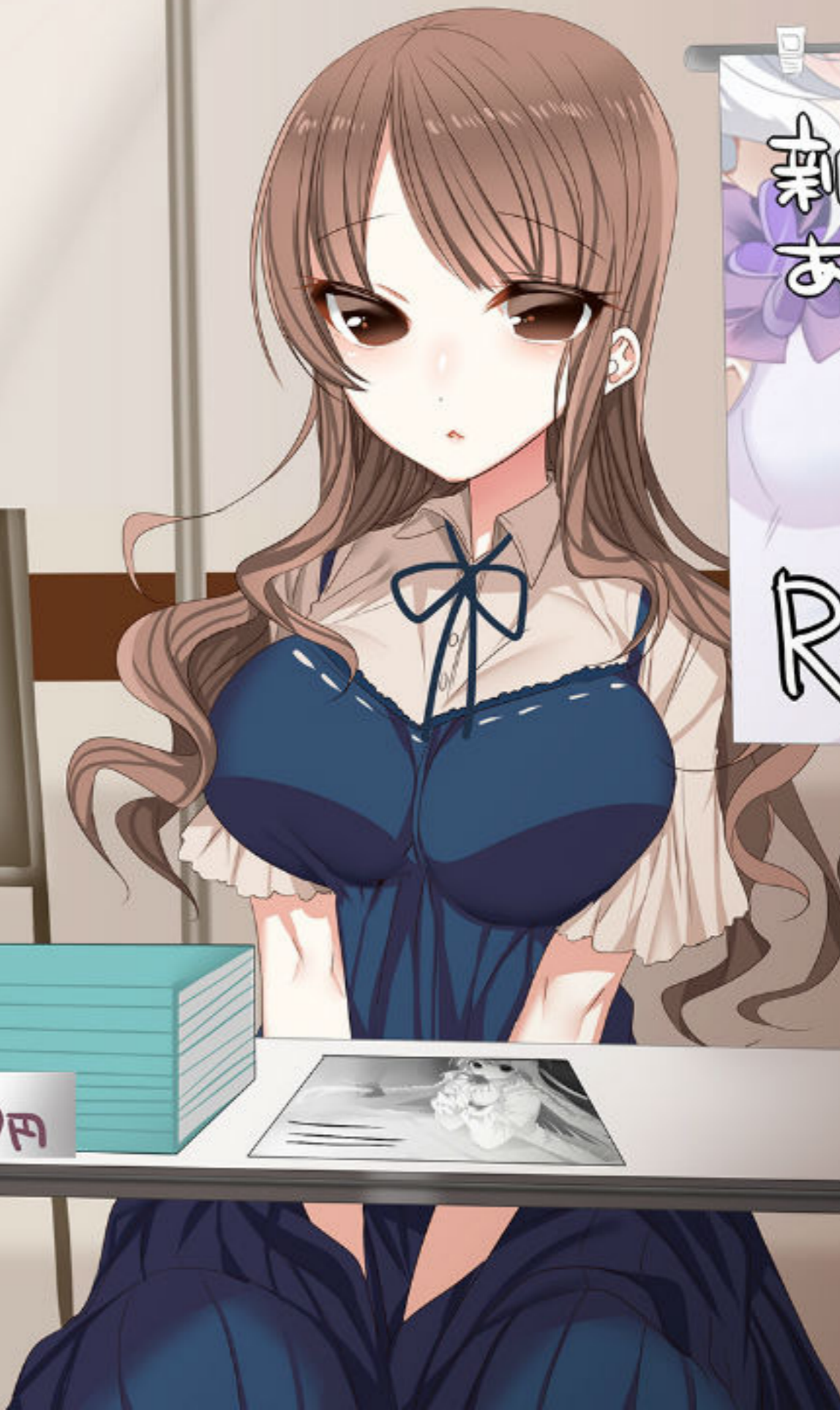
いじめたらガウガウお話。

あなたは
私の「資料」です

新刊
あります

基本CG12枚

みるくいじゃきゅれーしょん



(あ、ごさー)

あの子はいつもと同じくぼろっとした顔をしながらう
しゃんと背筋を伸ばして座っていた。

新刊はまだ何冊も積まれている、よかった。

僕は胸を撫で下ろしその子の前へ歩みを進めた。



ここは名のしれた同人誌即売会。
僕はこのイベントに毎回足繁く通っている。
……ちなみに僕はしがないアラフォーのキモオタおじさんで、
彼女いない歴〃年齢の真性童貞。
より良い慰みものを得るために
人でごった返している会場を回っているのです。



数回前のイベントで彼女、

「みほ」先生の同人誌を見つけた。

18禁のオリジナル男女カップルの本だった。

それを見た時、僕は衝撃が走った。

その絵、ストーリー、デザイン、どれをとっても

自分好みだったのだ。

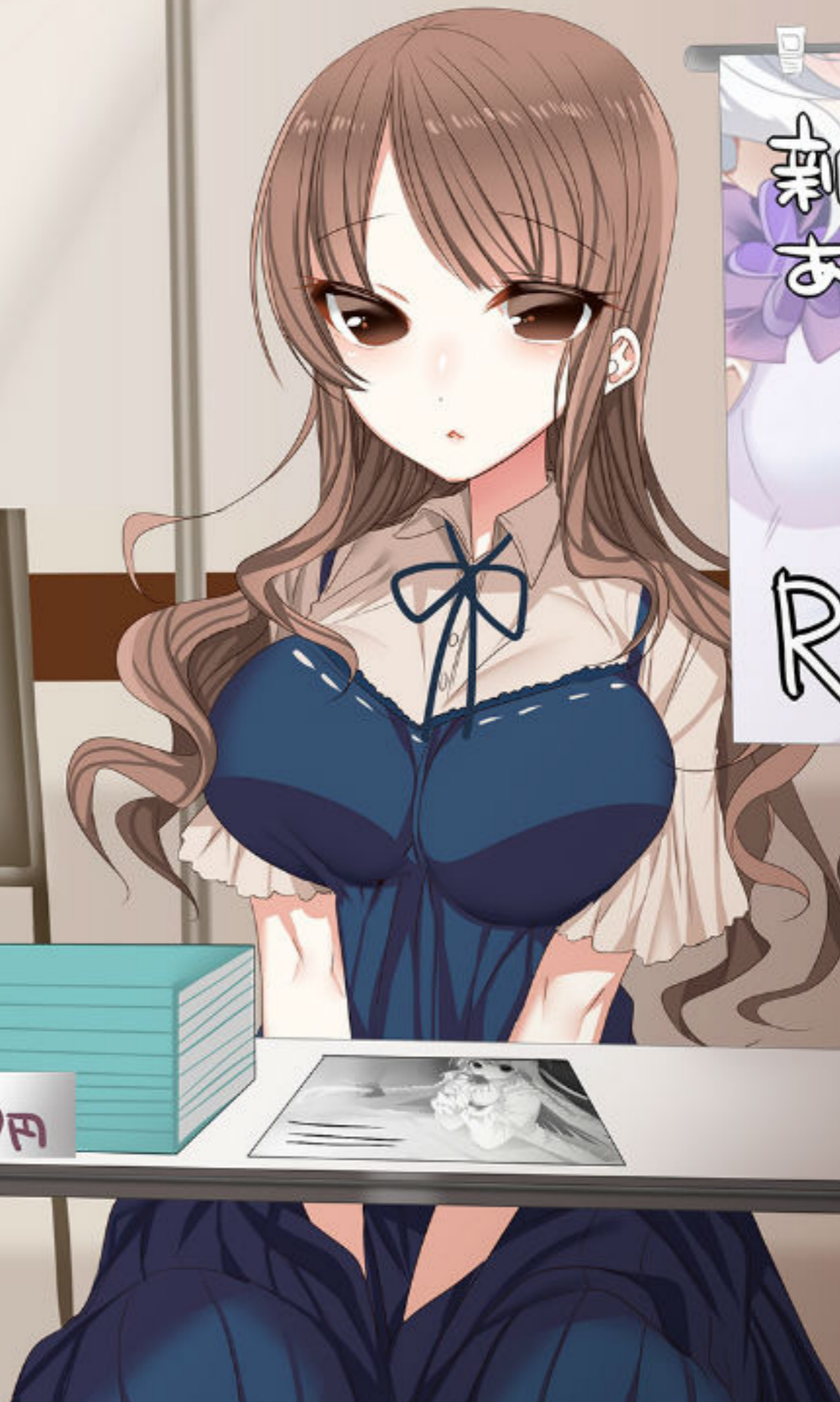
そして、今時ウェブ上でサイトを持たず

SNSをしていない、その姿勢に惹かれた。





イベントでしか新作を拝めないもどかしさが
僕の収集癖を駆り立てていたといっても
過言ではないだろう。
僕は一日に何回もみほ先生の作品を読み、
僕の心の拠り所とし、ケータイの待受画像も
みほ先生の同人誌の表紙を直撮りしたものを使用していた。
それほどまでに心酔しきっていた。



「あ、みほ先生、お疲れ様です」

僕は握りしめていた500円を渡し、

精一杯のキモオタスマイルを先生に送った。

「一部くだわっ」

「…あ、ごつもの…あらがよけいおつごめち」

「えっ？」

ごつもの…聞き間違いでなければそう言ったか？



先生はペーパーを同人誌の1ページ目に挟み、僕に手渡す。

「いつも…来てくださってますよね」

「え、あ、え…ええ?！」

作家に認知される、という経験は今までなかった。

それに僕は一読者であり先生の「絵」のファンだから、認知されたいという気持ちを持ったことがなかったのだ。





…いや、ちょっとばかりは思っていた。

美人で、絵も好みで、成人向けの同人誌を発行する

女性作家さんに認知されたらとれだけ嬉しい事なのかと。

まあ、現実には僕はイケメンではないし、

そこから発展してワンチャンがあるわけでもない。

匿名掲示板に「イベントでキモオタに粘着された」

と書かれたっておかしくはないのさ。

だから我を出すことを控えていたのだ。





「いいい、いつも先生の本、買っています」

「はい、知っていますよ」

「あ、あは、あは、そうですね。認知されてるし…。」

いやでもほんと前回の同人誌

読みましたけどやばかったですよ、前回ついでにっか

毎回買っていますけどー」

僕の滑りだした口は止まらなご。



「なんていうか、その先生の本は心の支えってところかー」

「…ええと、どっとういっ辺りで支えになっていますか？」

「先生の絵で毎晩何回も抜いていますー！」

「……」

世界が止まった気がした。

「あ…」

こんなだから、僕は一生童貞なのだ。

通行人もマこちらを冷ややかそっに見ている。



「…ありがとうございます」

僕は目と耳を疑った。

「エロ作家冥利に尽きます。嬉しいです」

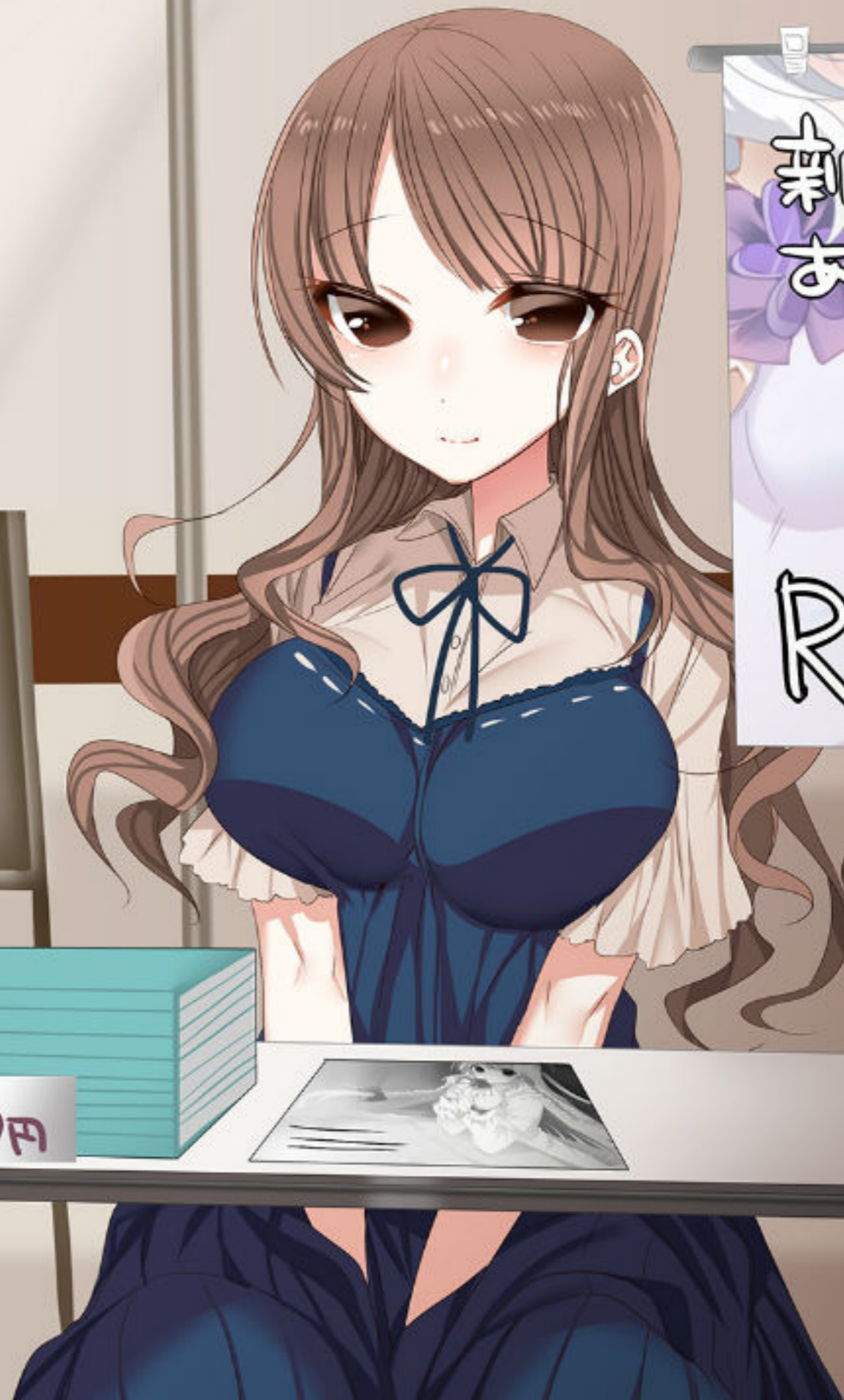
みほ先生は、なんと微笑んでいた。

いつもぼつと無表情で座っているみほ先生が、笑った。

「あ、あ、あ、すみません、女性相手にシモネタなんか…」

「いいですよ、描いているものの方が余程シモです」





「私、ネットが不得意で、SNSもサイトも
やっていますよ」

「だからマリアという反応をいただけるのは少ななくて
素直に嬉しいです」

「…そうだ、これ」

先生はメモ用紙に何かを書き、僕に手渡した。

「イベント後、よかったらご飯でも食べに行きませんが
それは、先生の電話番号だった。」

す、すみませんー！
奢ってしまいました……！

いいですよ

久々に人とお話が
できて楽しかったので

あ、あ、すみません…
次イベントで会った時
必ずお返ししますので！

それは悪いです

ん、ん…





イベント後、僕は先生に電話をし、
会場内で待ち合わせした後
駅近くの居酒屋へと向かった。

先生とは酒やつまみを飲み食いしながら
同人誌の話や自分が先生の作品を

どれだけ愛しているか延々と語り合っていた。

そこまでではよかったのだい。

僕は同人誌にお金をつぎ込むことに必死で

食事代を財布の中に残しておくのを失念していた。

これは本当に
一生の不覚というか
女性に出させるなんて
そんなぁ...

そっごですなぁ...

じゃあ...
一つだけあがまま
おごせようかおごせようか

はい、先生のためなら
なにごとでもおこないます...



もっともっと失念していたのは…。

僕がお酒に酔っていたこと。

みほ先生はお酒を一滴も飲んでいなかったこと。

僕が女性と話すのに慣れておらず

舞い上がってしまったこと。

そして…みほ先生が描く同人誌の内容のこと。



「いいお返事ですね」

先生はそう言っと、頭が回っていない僕の腕を掴み
駅とは反対方向に進み始めた。

「ど、どこに行くんですか?」

先生は振り返り、僕の目をじっと見つめて、
にっこりと笑った。

「ラブホテルに行きます」

初めて入るラブホテル。

初対面で、しかも憧れの人と入るとは

今まで一度も考えたことがなかった。

先生は難なくホテルへ入り、部屋に入った。手馴れていた。

今までフアンの人をマコウやって食べていたのだろうか。

その可能性があることに少しショックを受けたからか

僕の頭はぼんやりとしていた。

「ええと、これはどういうことなんでですかね」

部屋に入り、間が持たず僕は間抜けな言葉を発した。

先生はつまらなそうな顔をしながら「瞥する。

「今から、目隠しします」

「え？」

戸惑っている間に僕の目に黒い布が被せられた。

そして先生は躊躇うことなく

僕の腕と腕に布を巻きつけた！

「あなたには私の資料とさせておきます」



「いえ、どうも……」

「……」

「もう、そんなに暴れなさいましたっか」

自分の身に何が起きているのかさっぱり理解できなかつた。

「私のパンツ、そんなに汚いんですけどですか」

「……」

「……おがままきいてくれるってどうから」

素直に従うと思ったら……大間違いでしたな」




んぞは騙されて

私の本で抜くところを
ムリに挿れようとする
思ったんですけど...
抵抗はせんよな...



なんだ、
何が起ったところを...
...




その頃になって僕は酔いが覚め、
今の状況、そして先生が言っている言葉の
意味を理解した。

先生の18禁同人誌では女性優位で男受けの内容が多い。
というか殆どとそれ関係だ。

ややSMというか、非現実的な主従関係が
僕に少しだけあるM心をくすぐっていたのだ。

かといって、先生の作品の魅力はそこだけに
留まっているわけではない。

ましてや先生に責められたいなさげと
不埒なこととは考えたこともなく……。



やはりよりよい作品を
生み出すには
現実で自分も実体験しないと
いけないと思いますよ

最近はどうも
リアリティが出せず
筆の進みが悪くて
困っていました

あなたには
感謝しています

自らその身を
差し出してきて
くださったのでおかげ

ふふふ
ににに...ふふ

ふふふ
あなたは
強情な人ですねえ

意思を伝える手段が
封じられて、おまじない
腕を拘束されてるよにににに...

あなたは何故
勃起してるのさ...
おまじない...



みほ先生は…同人誌のヒロイン
そのままだ……!

作家=作品のヒロイン
ではないと分かっては
いたけれど……

…
いこなら、
興奮しないわけがない…!

私がいい作品を生み出すために
飽きるまでおっぴろげよう
あなたを資料に活用してもらいます

これから、よじろは
今夜限りの話のみ
お楽しみください

これから
あなたのみ
私の資料に活用してもらいます



あ...
返事がな...
いこと...
です...
な...?





お返事はちまちまこころ
さまごめいね〜

蒸れた足の臭い…

…股間が

痛くなるほどに

先生の足で

踏みつけられてこそ

身動きしても

乳首を挟んで離さない

洗濯バサミ

どれをとっても

僕にとっても褒美でしかない！

んんんんん！！！！

ごんごんごん…

それに加えて
僕の口に入っているパンツは
先生が先程まで
穿いていたものだ

先生が足を動かす度に
スカートの中にある
先生の秘部があられもなく
ちらちらと顔を覗かせている……！
興奮しないわけがない！

勃起するなど
言われる方が
無茶な話だ

はぁっ

ムヒッ

んっ
んっんんん

ヒッ

ヒッ

ヒッ


あ...
少し踏んだだけなのに
先走っちゃってますね

初対面の女の子に
踏まれて股間べちゃぶちゃぶに
しちゃっしん...
あつあつ変態って
なごすあはは...



私、男性が射精したところを
見たことがないので
興味深いんです

このまま圧を
かけてあげますから
思う存分射精してください

A manga-style illustration showing a woman with long brown hair and a blue bikini top on the left. On the right, a man is lying down with a blue vibrator on his chest. A hand is holding the vibrator, and there are red sound effects for the device and pink sound effects for the vibrator. There are several speech bubbles containing Japanese text.

この声で喘ぎますよねえ
女の子みたいですよ？

そうですねえ…
男性が尊厳を持つことなく
女性にいいように扱われている
えっちな同人誌を見て…
扱いちゃうくらいですからよねえ

マゾっぽいなと思って
くれるのが
好きですよ
仕方がないんですよ

私、加減をしているの
疲れちゃいました

潰れちゃうかなって思って
股間の方には
あまり体重をかけずに
いたんですが…

あなたには
そんな優しさは
要りませんよね？

全体重を
股間にかけていますね





16/5



びしょびしょびしょ

びしょびしょびしょ



ふふふふふ
もう戻れなく
なっちゃいましたかえ

も、もう……
もう戻れない……


あなたは私の
良い資料に
なりそうです

壊さない程度に
たくやこごごん
存分に可愛がって
あげますね



...あ、股をこじりた...
×お取らなすへ...

ふん?.



え
僕このまま放置？

先生は精液がついたタイツを脱がないまま

備え付けのテーブルに行き、メモを取り出した。

そして小一時間テーブルにかじりつくようにして

何かをひたすらメモしていた。

…その間、僕は拘束されたまま、

体にかかった精液を拭かないまま、放置されていた…。